

## 『人生の戦い—ある愛の物語』におけるディケンズの試み

永岡規伊子

1846年6月から11月にかけてスイスのローザンヌに滞在していたディケンズは、長編小説『ドンビーと息子』(*Dombey and Son*, 1846-48)の月刊分冊を書き進めながら、クリスマス・ブックスの第四作目となる『人生の戦い—ある愛の物語』(*The Battle of Life: A Love Story*, 1846)を完成させた。

彼の伝記作家ジョン・フォスターに宛てた手紙によると、その年のクリスマス物語として戦場や戦いのイメージが先にあり、当初から‘The Battle of Lives’というタイトルが考えられていた<sup>1</sup>。後に『二都物語』(*A Tale of Two Cities*, 1859)に登場する人物や、クリスマス・ブックス第五作目の『憑かれた男』(*The Haunted Man*, 1848)で実際使われることになる幽霊の話が構想にあったという(Forster 419)。その後、これまでのクリスマス・ブックスとは趣向を変えて、妖精や亡霊が登場しない、家庭内の出来事だけを扱った物語(a simple domestic tale)にするという方針が定まる。そして全体の三分の一を書き終えた9月20日付けの手紙には、「人情味のあるクリスマスの精神を基本にした面白い物語」となると自負する文章を記している(Forster 420)。

しかし、その6日後には一転して「クリスマスの本が出せないのではないかと危惧しています」(Forster 422)と、憔悴した手紙を書き送ることになる。それは、『ドンビーと息子』と並行して同時に二つの作品を創作することの困難さに加え、大都市ロンドンの「魔法のランプ(the magic

lantern)」がない田舎町ローザンヌでの滞在は『ドンビーと息子』の執筆にさえ支障を来していた。「自分の心に浮かぶ幻影 (my spectres) を群衆の中で追い払わなければ、それから免れることができないのです」(Forster 420) と述べているように、ディケンズにとって騒音と雑踏の夜の通りを歩くことが創作を続ける上で不可欠な習慣となっていたのである。彼は不安と焦燥に駆られ、夜にはガス灯が点るジュネーブにしばらく転地して『人生の戦い』に専念し、そこで書けなければその物語を断念するという選択を自らに課した。このように、『ドンビーと息子』を優先させる決意と『人生の戦い』を諦めたくないという思いとの葛藤の中で、「朝も、昼も、夜も、時には眠ることもできず、せせせと書き続け」<sup>2</sup>、文字通り自らとの闘いの末 10 月 17 日によく完成させたのであった。

## I

この作品は、他の四つのクリスマス物語である、*A Christmas Carol in Prose Being A Ghost Story of Christmas* (1843)、*The Chimes: A Goblin Story of Some Bells That Rang An Old Year Out and A New One In* (1844)、*The Cricket on the Hearth: A Fairy Tale of Home* (1845)、*The Haunted Man and the Ghost's Bargain: A Fancy for Christmas Time* (1848) と比べて、これまで最も低い評価がなされてきた。同時代の批評家の反応を見ると、エディンバラ・レビューの創設者でディケンズと親交の深かったジェフリー卿 (Lord Jeffrey) は手紙で賛辞を寄せ、また一部の批評家が小説の中心テーマとなっている自己犠牲の愛の崇高さを賞賛している。<sup>3</sup>しかし、それまでのクリスマス・ブックスを遙かに上回る売れ行きであったにも関わらず、この作品に対する評価は概ね手厳しいものだった。ジェフリー卿でさえも、後に「一般の声はこの作品をあなたの最高傑作の一つに数えることを断固と拒否しているよう

に思われます」<sup>4</sup>とディケンズに告げざるを得なかった。また、コベントリー・パットモア（Coventry Patmore）が書いたとされる書評では、周囲の人の苦悩を招く、常識では考えられないメアリアンの行動によって「人生の戦い」や「愛の物語」という崇高な題名が冒涇されたと酷評している。<sup>5</sup>この年のクリスマス物語を「誰もが悪口を連ねたが、誰もが読んだ。批評家から非難され、大衆から嘲られ、ライシーム劇場では野次られ、ついにはタイムズ誌によって『死んで葬られた』」<sup>6</sup>とウィルキー・コリンズ（Wilkie Collins）が述べているが、その言葉が当時の受け止め方をよく表しているだろう。

また、20世紀の批評家も、エドガー・ジョンソン（Edgar Johnson）の「犠牲的精神の甘ったるい感傷」<sup>7</sup>に過ぎないという評を初めとして、ディケンズの伝記研究に取り上げることはあっても、重要な作品として評価することはなかった。

## II

それでは、具体的に『人生の戦い』のどのような点に問題があるのだろうか。一つは、マイケル・スレイター（Michael Slater）が指摘するように、ストーリーが「あまりにも粗雑に短縮されて不自然さが残る」<sup>8</sup>というものである。この弱点はディケンズ自身が執筆中から危惧しており、フォースターへの手紙には、「八つ折り版<sup>9</sup>にしていれば、どんなにか感動的な物語にすることができたでしょうに」（Forster 435）と記している。また、出版の二年後にもディケンズは、小説家仲間であり、ジャーナリスト・政治家であったサー・エドワード・リットン（Sir Edward Lytton）に宛てて、次のような嘆きを吐露している。

I was thoroughly wretched at having to use the idea for so short a story. I did not see its full capacity until it was too late to think of another subject; and I have always felt that I might have done a great deal with it, if I have taken it for the groundwork of a more extended book. (4 August, 1848: Forster 435、下線は筆者)

また同じ年に、これを長編に書き直すことを提案するリットンの手紙に答えて、ディケンズは消極的ながらそのような願望は持っていることを示唆している。(Forster 435) フランク・ギブソン (Frank A. Gibson) も、この手紙の存在を踏まえて、『『人生の戦い』が長編小説に書き直されていたらと想像するだけで、わくわくする』<sup>10</sup>と述べているように、この小説の主題を短編小説の枠組みにはめることの困難さに問題があったのは誰もが認めるところだろう。

### III

次に二つ目の問題点として挙げられるのは、小説の題名とテーマが齟齬を来している点である。この題名は先に述べたように、ストーリーの構成以前に決めていたものであった。ディケンズは当時、チャップマン・アンド・ホール (Chapman and Hall) とブラッドベリー・アンド・エヴァンス (Bradbury and Evans) の2社と著作権の契約を結んでいたが、<sup>11</sup>前者のトマス・チャップマン (Thomas Chapman) に題名を予告したため、筋書きが定まっていない8月末までに、それが広く誌上で宣伝されていた。<sup>12</sup>先の英文引用の下線部にある「別の主題を考えるには遅すぎた」という事態は、クリスマスに間に合うように原稿を仕上げる期限が迫っていたという意味合いと同時に、既に本の題名を公表していたために引き返せなかった

ことを指すと思われる。

そのような状況で、ディケンズは小説の題名についてフォースターの意見を求める手紙を書いている。10月17日に完成した原稿の一部を郵送しているが、それに添えた手紙に、「この物語が普通の意味での恋愛物語（a love story）であると同時に、愛の物語（a story of love）であることを表すのに、『The Battle of Life: A Love Story』という題でよいだろうか」（Forster 428）という迷いが記されているのである。

この小説は、仲の良い姉妹グレースとメアリアン（Grace and Marion Jeddler）の二人が、幼なじみのアルフレッド（Alfred Heathfield）への恋愛感情を人知れず犠牲にして互いに譲り合うという家族愛・姉妹愛を描いた物語である。しかしそのプロットは登場人物間にも読者にも隠されて、第三部の最後まで明かされることはない。ヴィクトリア朝時代においては、センセーショナルで家族に汚名を残す行為である駆け落ちと裏切りの物語としてストーリーが進んでいくのである。

第一部では、メアリアンと婚約をしているアルフレッドが3年間の修行に旅立つ日の一日が描かれ、第二部では地主の放蕩息子マイケル・ウォーデン（Michael Warden）がメアリアンに求婚し、アルフレッドが帰還する日に二人が駆け落ちする（と見せかけた）場面で終わる。そして、第三部では6年の歳月を経て、メアリアンの願いと計略通り、姉のグレースとアルフレッドが結婚して幸せな家庭を築いたところに、メアリアンが身を潜めていた叔母のマーサ（Martha）のもとから戻って真実を告げる。

このような推理小説仕立ての筋書きはディケンズが好んで用いた技法であるが、メアリアンとマイケル・ウォーデンの逢い引きの場面（実際にはメアリアンが彼を信頼して自分の計画を打ち明けた場面であったことが後に明かされる）で、一緒にいた召使いで姉妹の養育係であったクレメンシー（Clemency Newcome）が二人の会話を駆け落ちの約束と確信してし

まうところから、読者の誰もがそれを疑わなくなる。ディケンズは依頼していた4人の挿絵画家にさえも隠されたプロットを伝えていなかったために、その部分を担当したジョン・リーチ (John Leech) が表面の筋書き通りに、二人の出奔の場面を描き、そのまま挿絵として印刷されてしまったという逸話が残っているほどである。

そのことを考えると、信頼できる目撃者であるクレメンシーを小道具として使ったのと同様に、ディケンズは読者を惑わすためのレッド・ヘリングとして、一般には「恋愛物語」を意味する‘A Love Story’をタイトルに選んだのではないかと考えられる。しかし、小説のテーマとしてふさわしい副題は、やはり、より深く広い意味を持つ‘A Story of Love’であるとディケンズは感じていた。だからこそ、一抹の迷いをフォースターに打ち明けたのであろう。

また、「人生の戦い」というメイン・タイトルについても、それが小説のプロットと有機的に繋がっていないことが、先に挙げたパットモアのような批判を生じさせる原因となっているのは明らかである。

小説の冒頭でのいにしえの時代の戦いと古戦場の年月の移り変わりの描写は、ディケンズ後期の長編小説の冒頭部分を想起させるような荘重な文体となっている。彼の構想にあったのは、このような歴史上の戦いと、家庭という日常生活での人生の戦いを関連づけて、テーマに重層性を持たせることであり、古戦場の歴史の描写に続いて描かれる、林檎が撓わに実った果樹園でグレースとメアリアンが無邪気に踊る場面は、この小説のテーマを鮮やかに示していると言える。姉妹の踊りに興じる心の内には深い葛藤を秘めていたことが後に明らかになるが、戦いの傷跡が薄れるまで百年単位の年月を要したとされる古戦場の描写はその伏線となるのである。

また、グレースとメアリアンの父ドクター・ジェドラー (Doctor Jeddler) が持つ「世の中は茶番でしかなく、真剣に考えるに値しない」<sup>13</sup>

という信念は、古戦場跡に住み、戦争という愚かな行為を日々思い出すことによって培われたと述べる。それに対して、アルフレッドは「人生というより広い戦場では、そのような古戦場を時には忘れた方がよい」(Battle 252) という比喩で、ジェドラーの哲学に対抗する場面が描かれる。「ささやかな家庭や人々の心にも存在する静かな勝利と苦闘、偉大な自己犠牲、高潔で勇敢な行為」に価値を置くアルフレッドの言葉に熱心に耳を傾けていたグレースとメアリアン姉妹が、自らの人生における真摯な戦いを再確認する場面である。

しかし、それ以降の小説の第二部と第三部では戦場についてほとんど言及されることはなく、戦いのイメージによって小説全体が統一されることはない。作者自身が「校正刷りの時に、戦場についてもう一言、二言有効に使うことができるのではないか」(Forster 437) と考えていたことが手紙に記されているように、この弱点についてもディケンズは周知していたことが窺える。

#### IV

そして、『人生の戦い』で最大の謎となるのが、グレースとメアリアン姉妹の自己犠牲の行為、とりわけメアリアンの大胆で不可解な行動であり、それをどう捉えるかという問題がある。先に見たように、それを崇高な愛の業と考える読み方もあるが、独善的な、あるいはセンチメンタルな愚かな行為と考える読み方が多くを占めている。

この点に関して、ディケンズの伝記的要素と小説を関連付けて解釈しようとする二つの見方がなされてきた。一つは、スティーブン・マーカス(Steven Marcus) に代表されるような、ディケンズ自身の家族関係を糸口として二人の姉妹の関係を捉えようとするものである。彼は、ディケンズ

が、たとえ無意識にであったとしても、義理の妹メアリーとジョージーナ (Mary and Georgina Hogarth) を、グレースとメアリアンの姉妹に投影していると解釈する。<sup>14</sup>

そしてそれとは逆の方向であるが、キャサリン・キャロラン (Katharine Carolan) のように、小説の中に伝記的な事実を読み取ろうとする見方がある。この物語が不自然でセンチメンタルな失敗作であるからこそ、その中に作家が精神的な危機を抱えていた時期を解明する手掛かりがあると考えたのである。<sup>15</sup> 彼女はゴールドスミス (Oliver Goldsmith) の短編小説『ウェイクフィールドの牧師』 (*The Vicar of Wakefield*) からの影響を検証し、ストーリーとテーマの共通点以上に重要な、キリスト教の伝統的な教えが両者の基盤にある点に注目する。そして、慈悲を意味する名前を持つクレメンシーが持ち歩いている指貫とナツメグ卸器に刻まれた言葉「忘れよ、そして許せ」 ('For-get and for-give.') という諺と、「人にしてもらいたいことを人にしなさい」 ('Do as you-would-be-done by.') というキリスト教の黄金律がこの小説のバックボーンとなっており、特に前者が、ディケンズが過去の記憶に悩まされていた時期にあって最も関心を寄せていた言葉だったと分析する。<sup>16</sup>

この作品がクリスマス・ブックスの一つとして創作されたものであることから、キリスト教のメッセージが多分に託されているのは当然のことだが、キャロランが述べているように、この作品は他のどのクリスマス物語よりも宗教的なイメージや用語が多く使われている。クレメンシーの新約聖書的な世界観を初めとして、放蕩の末に破産寸前になり、「メアリアンのすばらしい影響力を受けて別人になりたいと思っている」 (Battle 266) マイケル・ウォーデンは、聖書の「放蕩者の譬え」を思い起こさせるだろう。

そして何よりも、主人公である二人の姉妹が、ディケンズの描く他の多くの焔辺の天使と同じく、キリスト教的な愛の象徴となっている。姉グ

レースは「優しく控えめで、それでいて忍耐と勇気を備え、家庭を崇拝し、無私の精神を持っており」、母親の死後、4歳程しか離れていない妹メアリアンの母親の役割を担ってきたために、「心は清められ、気高い性質が天使に近づいていた」と描写される。(Battle 244)そして、妹のメアリアンも6年間の失踪の後にグレースの元に姿を現した場面で、やはり次のように光輝く天使の姿に喩えられている。

... as the setting sun shone brightly on her upturned face, she might have been a spirit visiting the earth upon some healing mission. (Battle 305)

ディケンズは旅先のローザンヌに着いてすぐに、つまりこの物語を書き始める直前に、子どものための聖書『主イエスの生涯』(*The Life of Our Lord*, 1846-49: 1934年に出版)を書き始めた。(Forster 395)当時のイギリスの宗教界は大きな変革の時期にあり、ディケンズが自らのキリスト教信仰の揺らぎを経験する中で、その基盤を求めて聖書に向き合ったのがこの時期であったと考えられる。<sup>17</sup>このイエスの物語は、家庭内で子どもたちに読み聞かせるためだけの手書きの聖書として扱われ、出版されることはなかったが、そのような時期に『人生の戦い』が構想されていたことは、この作品の解釈にとって重要な事項となるだろう。この年のクリスマス物語という世俗的なストーリーの中に、聖書の教えを組み込もうとしたディケンズの試みが読み取れるのである。

## V

初めに述べたように、この物語はこれまでのクリスマス・ブックスとは異なり、幽霊や妖精を登場させず、また社会的な問題を扱わずに、シンプ

ルな家庭の物語とするという新たな試みでもあった。そうであれば、フェアリー・テイル的要素や社会的なテーマを持つ小説とは異なったジャンルとして、登場人物の緻密な心理描写の積み重ねがより多く要求されるだろう。

グレースがメアリアンとアルフレッドの婚約を喜びながら、アルフレッドへの秘かな恋愛感情を抑える苦悩や、メアリアンがそれを見抜いてアルフレッドへの愛と姉への愛の間で苦悩する様子は、確かに綿密に描かれている。しかし、これまで述べてきたように、二人の姉妹はあまりにもキリスト教的な美德を纏い、アレゴリカルに描かれているため、アルフレッドとの関係も現実味を帯びて描かれることはない。

例えば、第一部でのアルフレッドの旅立ちの場面で、3人の関係が次のように象徴的に語られる。

The younger sister (Marion) had one hand in his (Alfred's): the other rested on her sister's (Grace's) neck. She (Marion) looked into that sister's eyes so calm, serene, and cheerful, with a gaze in which affection, admiration, sorrow, wonder, almost veneration, were blended. She looked into that sister's face, as if it were the face of some bright angel. Calm, serene, and cheerful, the face looked back on her (Marion) and on her (Marion's) lover. (Battle 258 括弧内は筆者)

このメアリアンの描写は婚約者の旅立ちにしては不自然な光景である。彼女はアルフレッドを見てはおらず、姉の「穏やかで澄んだ、明るい目を」そして、「光り輝く天使のような、穏やかで澄んだ、明るい顔」を、愛情と敬慕と悲しみと驚きと、崇拜に近いまなざしで見つめ続ける。

また、第二部で、アルフレッドの帰国の予定が知らされた時に、メアリ

アンはグレースに向かって、‘I have loved *you*, all the time, dearer and dearer every day; and O! how dearly now!’ (Battle 272) と訴える。そして、出奔することを決めた日には、眠っている姉のそばで、‘how that Grace had been a mother to her, ever, and she loved her as a child!’ (Battle 278) と呟く。

このように、アルフレッドを巡る恋愛の三角関係からは、奇妙なほどにアルフレッドが疎外され、姉妹の母娘的な愛情関係ばかりが強調されている。そのため、第三部でグレースに向かってメアリアンが失踪の真実を話す場面における ‘I loved him from my soul. I loved him most devotedly. I would have died for him, though I was so young.’ (Battle 305) という、アルフレッドに対して抱いていた愛の告白の言葉が、いかにも唐突に感じられるのである。

ディケンズはクリスマス・ブックス5作品の中で、イエスの教えである隣人愛、貧しい者への憐れみ、赦し、良い行いを勧めるクリスマスのメッセージを送り続けた。『人生の戦い』では、メアリアンの自己犠牲的な行為や、「苦しみ、忍耐することで純粋な幸福と勝利が得られる」(Battle 306) というメアリアンの言葉で表現されるようなキリスト教の教えを描こうとしているように思われる。ディケンズには、メアリアンの行為の根拠として「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない」(ヨハネによる福音書、15:13) という聖書の言葉があったに違いない。彼女は駆け落ちの噂によって社会的に死に、第三部では肉体的にも既に死んでいるような印象を読者に与えている。そして、先に引用した、グレースの前に再び現れるメアリアンの姿は復活による新たな命を印象づけるのである。

しかし、このメアリアンの行為が果たしてキリスト教の愛と言えるのだろうかという疑問が残る。彼女の自己犠牲は、アルフレッドの愛をも犠牲にした。そしてグレースの彼女への愛をも傷つける行為であったことは否

めない。彼女の行為は「友のために自分の命を捨てること」には決してなっていないところに、多くの読者の反感があったのではないだろうか。ディケンズはこのように、きわめて世俗的な恋愛の物語に聖書の教えを埋め込もうとした。しかし、聖書の譬え話からは大きくはみ出てしまったところに、この作品の失敗があったと言えるだろう。

また先に述べたように他のクリスマス物語で用いた超自然的要素や、フェアリー・テイルの枠組みを敢えて排したところにこの小説の挑戦があった。しかし、長さの制約もあり、十分な心理描写を積み重ねることができずに、寓話的な人物設定や筋書きに頼った面があった。けれども、この作品で試された‘a simple domestic tale’は、月刊分冊が始まったばかりの『ドンビーと息子』に引き継がれ、後期作品の家族の描写においてしっかりと根を下ろすことになる。『人生の戦い』はその過渡期にある小説として、重要な意味を持つように思われるのである。

## 注

- 1 7月18日のフォースターに宛てた手紙でこのタイトルがふと浮かんだことを伝えている。(John Forster, *The Life of Charles Dickens, Vol.1*, Everyman's Library, 1966, p.410.) 以後フォースターからの引用は Vol.1 からのもので、引用の後に頁数だけを記す。
- 2 The Pilgrim Edition, *The Letters of Charles Dickens, Vol. 4*, p.638. 以後この書簡集からの引用は Letters と記す。
- 3 12月19日の出版以前に校正刷りを受け取っていたジェフリー卿はディケンズに宛てて14日付けで賛辞の手紙を送り、(Letters 670, 685) それをフォースターに転送したのが12月27日となっている。(Forster 433) また、メアリアンの崇高さを賞賛しているは、*Working Men's Friend* (21 August 1852) の書評と、J. Westland Marston が書いた *Anthenaeum* (26 December 1846) の書評である。(Dickens: *The Critical Heritage*, ed. by Philip Collins, Routledge and Kegan Paul, 1971, p.145.) さらに、*Examiner* (26 December 1846) の好意的な

- 書評はフォースターが書いたと推測されている。(Oxford Reader's Companion to Dickens, ed. by Paul Schlicke, Oxford U.P., 1999, p.34.)
- 4 Paul Davis, *Critical Companion to Charles Dickens: A Literary Reference to His Life and Work*, Facts on File, 2007, p.32.
  - 5 “[Coventry Patmore?], from a review ‘Popular Serial Fiction’, *North British Review*, May 1847, vii, 114-17.” (rept. in *Dickens: The Critical Heritage*, pp.177-9.)  
また Edgar Johnson の伝記によると、『クリスマス・キャロル』を絶賛したサッカレイでさえも、この作品を ‘a wretched affair’ と呼び、“Dickens’s old foe *The Times* slashed it brutally.” と記している。(Edgar Johnson, *Charles Dickens: His Tragedy & Triumph*, The Viking Press, 1952, p.325.)
  - 6 Wilkie Collins, *Sharpe’s London Magazie*, January 1849, viii, 188. (*Dickens: The Critical Heritage*, p.145.)
  - 7 Edgar Johnson, p.325.
  - 8 Michael Slater, “The Christmas Books”, *The Dickensian Vol.65*, 1969, p.22.
  - 9 長編小説を月間分冊で出版するときの製本形式
  - 10 Frank A. Gibson, “Nature’s Possible: A Reconsideration of *The Battle of Life*”, *The Dickensian*, Vol.58, 1962.
  - 11 Robert L. Patten, *Charles Dickens and His Publishers*, The Clarendon Press, 1978. p.349. によると、Chapman and Hall が出版社となっているが、実際の印刷や会計の仕事は Bradbury and Evans が行っていた。
  - 12 Patten, p.182.
  - 13 Charles Dickens, *Christmas Books*, Oxford UP, 1987, p.243, 250. なお、この小説からの引用はこの Oxford Illustrated Dickens 版を用い、引用の後に頁数だけを記す。
  - 14 Steven Marcus, *Dickens from Pickwick to Dombey*, W.W. Norton & Company Inc., pp.289-292.
  - 15 Katharine Carolan, “The Battle of Life, A Love Story” *The Dickensian*, Vol.69, 1973, pp.105-110.
  - 16 Carolan, p. 109. クレメンシーがたどたどしく読む ‘Do as you would be done by’ は、言うまでもなくマタイ 7:12、ルカ 6:31 にある聖句を簡略化したものであるが、‘Forget and forgive’ は聖書のどこにも書かれてはいない一般的な諺

である。ディケンズが「赦しなさい。そうすればあなた方も赦される（ルカ 6:37）」という聖句を間違えて使ったのか、あるいは敢えて forget を意識して諺を用いたものかを検証する必要があるだろう。『クリスマス・キャロル』や『憑かれた男』では、記憶を消し去り忘れることが人間性の喪失をもたらすことをテーマとしていた。時期的にこの二作品の間に書かれた『人生の戦い』に、意識的、無意識的にせよ、「忘れよ、そして許せ」の言葉がキーワードとして用いられているところから、ディケンズ自身が持っていた、『憑かれた男』の主人公レドロウの苦悩を見ることができないのではないだろうか。

- 17 拙稿「チャールズ・ディケンズ『主イエスの生涯』に現れたキリスト教観」（『キリスト教文藝』第二十七輯、日本キリスト教文学会関西支部、平成 23 年、pp.1-17. に詳しく論じた。

#### 参考文献

- 1 John Forster, *The Life of Charles Dickens, Vol.1*, Everyman's Library, 1966.
- 2 Pilgrim Edition, *The Letters of Charles Dickens, Vol. 4*.
- 3 *Dickens: The Critical Heritage*, ed. by Philip Collins, Routledge and Kegan Paul, 1971.
- 4 *Oxford Reader's Companion to Dickens*, ed. by Paul Schlicke, Oxford U.P., 1999.
- 5 Paul Davis, *Critical Companion to Charles Dickens: A Literary Reference to His Life and Work*, Facts on File, 2007.
- 6 Edgar Johnson, *Charles Dickens: His Tragedy & Triumph*, The Viking Press, 1952.
- 7 Michael Slater, "The Christmas Books", *The Dickensian Vol.65*, 1969.
- 8 Frank A. Gibson, "Nature's Possible: A Reconsideration of *The Battle of Life*", *The Dickensian, Vol.58*, 1962.
- 9 Robert L. Patten, *Charles Dickens and His Publishers*, The Clarendon Press, 1978.
- 10 Steven Marcus, *Dickens from Pickwick to Dombey*, W.W. Norton & Company Inc..
- 11 Katharine Carolan, "The Battle of Life, A Love Story" *The Dickensian, Vol.69*, 1973.